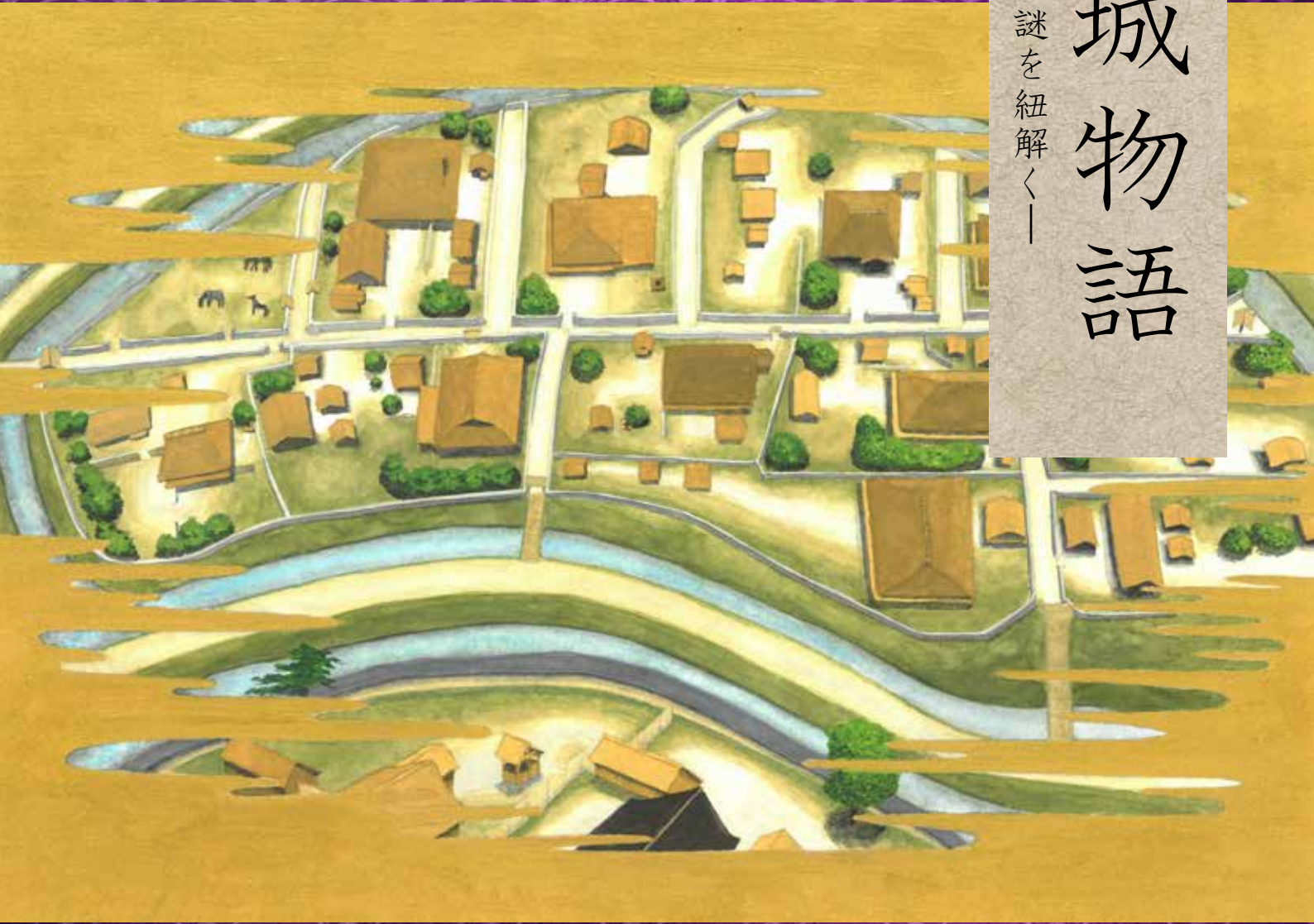


# 浪岡城物語

—浪岡城の謎を紐解く—



浪岡城北館

青森市教育委員会



上杉謙信

武田信玄

戦国時代に活躍した武将たち

## 序章

浪岡城は、武田信玄や上杉謙信などの武将たちが活躍した「戦国時代」、16世紀の半ばにおいて、浪岡周辺、北津軽、そして外浜そとのはまの北半部に勢力を有していたと考えられている浪岡北畠氏の居城です。

浪岡北畠氏の先祖については諸説ありますが、南北朝時代に南朝方として活躍した公卿、北畠親房の子孫と伝えられています。

親房の長男顕家あきいえは、後に袂たもとを分かつて室町幕府を創設した足利尊氏あしかがたかうじが最も恐れた武将と言われており、親房と顕家親子は、今日でも多くの書物や小説、ドラマに取り上げられ親しまれています。福島県にある霊山神社りょうぜんや三重県の北畠神社は、北畠親房親子を祀っており、浪岡地区では、顕家の子孫と浪岡城を結び付けて「浪岡北畠まつり」を開催しています。また、浪岡北畠氏は、「浪岡御所なみおかごしよ」と呼ばれていたと言います。「御所」とは、天皇のご在所を指す言葉ですが、室町時代になると「花の御所」で知られるように、室町将軍に対しても用いられるようになるなど、適用例は広くなっています。奥羽地域においては、室町幕府による支配の要とされた特定の足利一族のほか、この浪岡北畠氏に「御所」号が用いられました。

しかし、天正6年てんしやう（1578）7月、浪岡城は大浦為信おおうらためのおぶに攻撃され、浪岡御所・北畠頭村あきむらは自害したと伝えられています。一方、天正10年（1582）頃、為信は、元龜2年（1571）に津軽独立を目指して、南部宗家そうけである三戸南部氏に対し反旗を翻ひるがえししますが、これまで獲得した南津軽の各地を返還して降伏したため、浪岡城は南部信直のぶなおの手に渡り、信直は、ここに津軽郡代として政信まきのぶを派遣したという見解も示されています。



現代の浪岡城跡と桜（上空から）

いずれにしても、大浦為信による津軽独立が成った後は、城館の機能を失い、江戸時代には田畑として利用されたと伝わっています。

その後、浪岡城跡は、昭和15年（1940）2月10日に青森県初の国史跡に指定され、平成29年（2017）4月6日には「続日本100名城」に選ばれました。

日本の名城として認められた浪岡城ですが、この城がいつ、どんな理由で築かれたのか、また、北畠親房の子孫がいつ浪岡に入部したのかなど、浪岡城と浪岡北畠氏は、数多くの謎に包まれてきました。しかし、現在では浪岡城跡の調査研究が進み、また、浪岡北畠氏についても文献史料などからの分析が進展しました。

それでは、こうした成果をもとに、ベールに包まれた浪岡城と浪岡北畠氏の謎を少しずつ紐解いていきましょう。



後醍醐天皇

北畠顕家

北畠親房

後醍醐天皇と北畠氏

## 第一章 謎の名族・浪岡北畠氏

浪岡北畠氏の出自については、浪岡御所の元に代々保存されていたはずの重要な相伝史料の大部分が、浪岡落城などの戦乱の中で散失してしまい、弘前藩に持ち出された史料も、高岡城（現在の弘前城）天守の落雷の際に焼失してしまったと言われています。そのため、浪岡北畠氏の先祖は、親房の嫡子・北畠顕家の子孫とするものや、顕家の弟・北畠顕信の子孫とするなど実に多様であり、どれが正しいのかはつきりとわかりません。諸系図で一致するのは、北畠親房の子孫であるという点ですが、それを実証するまでには至っていません。

浪岡北畠氏の先祖と言われる北畠親房から浪岡北畠氏の浪岡入部までについて、現在までにわかったことを説明していきましょう。

北畠親房は、村上天皇の子孫となる公卿で、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて活躍し、南朝の正統性を主張した『神皇正統記』を記しました。その子どもには、長男の北畠顕家や、伊勢国司家の祖となつた三男の北畠顕能などがいます。

元弘3年（1333）5月、鎌倉幕府は終焉を迎えました。しかし、幕府の実権を握っていた北条氏嫡流である得宗高時の弟・泰時らは、陸奥国へ逃げ延びるなど、東北地方では、北条氏残党の勢力がしばらく活動を続けることになりました。一方、配流先の隠岐を脱出した後醍醐天皇は、幕府が滅んだことを知って京都に戻り、新たな政治を始めました（建武の新政）。

同年8月5日、北畠顕家は、後醍醐天皇から陸奥守に任命されました。これは、東北地方に勢力を拡大しつつある足利尊氏に対抗する動きで、護良親王を奉じて、親房とともに陸奥に向けて出立しました。陸奥



浪岡北畠氏の浪岡入部の様子

国府の多賀城（宮城県）に到着した顕家らは、ここを拠点に、奥州を掌握しようとした。

津軽地域では、旧幕府方の勢力による後醍醐天皇の建武政権への抵抗が続いていました。これに対して顕家は、各地の有力武士を津軽に派遣し、翌年にかけて戦乱は収束に向かいました。

その後、顕家は、後醍醐天皇に反旗を翻した足利尊氏との合戦により、建武5年（1338）に和泉国で戦死し、さらに文和3年（1354）に親房が大和国で没した後、南朝は、事実上北朝に敗北します。この時、津軽地域では、南朝方の南部氏と、十二湊を拠点としていた安藤（安東）氏との対立が深まっていました。

15世紀半ば、南部氏に十三湊を攻められた下国安藤氏は、夷島（北海道）に逃れ、その後、南部氏から津軽を奪回しようと試みますが、文明2年（1470）を最後に断念し、明応4年（1495）に檜山城（秋田県）を築いて本拠とします。この下国安藤氏の方針転換のもと、室町幕府の仲介により、事実上の南部・安藤両氏の講和がなつたと言われています。それは、夷島の支配権をあらためて安藤氏にゆだねる代わりに、下北や津軽内陸部などの旧安藤領に対する支配を南部氏に認めるといったものでした。さらに、この時、両者の緩衝勢力として、浪岡北畠氏に北津軽及び外浜北半部の支配をゆだねる措置がとられたと思われます。浪岡北畠氏が浪岡に入部したのは、この時期だと考えられます。



浪岡城周辺の街道と関連城館

(※) 各街道は近世の名称

## 第二章 交通の要衝・浪岡

浪岡地域の伝承によると、浪岡北畠氏は、浪岡城に入る前に吉内地区に居を構えていたとされます。実際、吉内地区からは、14～15世紀頃と思われる陶磁器が出土しており、また、吉内の丘陵地には、現在でも五輪塔の残欠が存在し、市指定文化財である伝北畠氏墓所の二か所は、吉内集落の西側に広がる田圃の中に位置しています。特に、伝北畠氏墓所(一)がある場所には、「五倫」という小字名が残っています。さて、浪岡城跡の発掘調査によると、浪岡北畠氏入部以前の遺物や堀跡も発掘されており、12世紀後半の浪岡城跡の出土品が、岩手県・平泉遺跡群の組成に近似していることから、奥州藤原氏と関連する豪族の「館」が存在していた可能性があります。

平泉から外浜地域まで延びる「奥大道」(陸奥を通る中世の幹線道路)のルートを考えるなかで、浪岡城は、中継的な役割を担っていたとみられ、浪岡北畠氏がこの場所を選び居城としたのは、津軽平野、さらには外浜方面への交通の要の地であったからだと考えられます。

具体的に言うと、浪岡城周辺には、津軽と陸奥湾を結ぶ「大豆坂街道」や浪岡と十三湊を結ぶ「下之切通り」、大鰐から黒石を通り浪岡まで伸びる「乳井通り」や「羽州街道」などが走っており(※)、浪岡城は、各街道の結節地点付近に築城されています。そして、これらの街道筋には、浪岡城と関連する中世城館があり、浪岡城は、ヒト・モノの流れの拠点として役割を有していたと考えられます。

さらに浪岡城は、夷島(北海道)との交易においても利便性の高い場所であったと考えられ、夷島からもたらされる鮭やアザラシ・ラッコの皮などの交易品は、日本各地で貴重品として珍重されました。



往事の浪岡城

### 第三章 浪岡城跡の位置と構造

浪岡城跡は、東側から傾斜する扇状地の突端部にあつて、浪岡川の北岸に分布する段丘に立地しています。標高は36〜40mで、崖下を流れる浪岡川の河床とは5〜6mの比高差があるため、河川の氾濫原を堀として活用し、段丘上の平場を区画する形式で構築されています。

この城跡は、東西に940m、南北に245mと、東西に細長い城館を形成しており、東側から新館・東館・猿楽館・北館・内館・西館・検校館、さらには大豆坂街道沿いの無名の館から構成される、8か所の独立した平場があり、それぞれ幅約20mの堀などで区画されています。

史跡指定地は、約13万6300㎡に及び、東側には加茂神社、西側には八幡宮の神社領域が存在します。また、加茂神社に近接する街道筋には七日町という地名が残るなど、城下町も存在したと思われます。

追手門などは未だに発見されていませんが、北館の西側では、敵からの侵入を防ぐため、出入口部分を屈折した枡形状に構築し、門を配置していることがわかりました。また、西館の南東部からは、橋脚跡も発見されています。

浪岡城跡の特徴として二重堀・三重堀があり、これは堀の中央を掘り残しているもので、中土壘と呼ばれています。この中土壘は、敵が侵入した際に、中土壘を通る敵を周囲の館から狙い撃ちに来るなど、防御に適した施設になっているほか、城内の通路としても使用していたと考えられています。

堀は、現在の地表面よりも2m程度深く、敵が落ちると登りづらくなっています。また、堀には、流水路を管理し、水量を調節したとされる遺構も確認されており、当時は水堀だったと考えられます。



九間での政務の様子

## 第四章 城主の居館

浪岡城跡から検出された遺構は、掘立柱建物跡と竪穴建物跡、そして井戸跡が組み合わせになっており、屋敷単位の集合体であることが大きな特色です。

浪岡城跡のうち、全域を発掘調査したのは北館と内館ですが、内館から発掘された建物跡の一つに、浪岡城跡でも唯一特別な造りをしている建物跡がありました。

それは、礎石の上に柱が立てられた礎盤石建物跡であり、この建物跡の発掘により、内館は、城主の居館や政庁的な機能を有していたと考えられています。

この礎盤石建物跡の部屋割りは、六間二室、九間一室と縁・入口が想定されています。「九間」と呼ばれる部屋は、二間×二間の大きさで、武家住宅の会所や主殿に使われ、対面座敷のような機能を有することが多いとされ、浪岡城でも城主が様々なお客と対面し、政務が執り行われていたことが想像できます。

このように内館は、政庁的な機能を有していたことが考えられるため、もう一方の北館は、家臣団等の武家屋敷が存在したと想定されるようになりました。

また、内館及び北館は、鋳型・埴塙・羽口などの鋳造に関する遺物も出土しており、鋳造を生業とする職人・工人が、城主や武家とともに起居していた居住空間となっていました。





北館での暮らしの様子

## 第五章 浪岡城での暮らし — 北館の発掘調査成果 —

北館には、東西に走る区画道路の南北に屋敷割が見られ、15世紀後半から16世紀末までの各時期において、屋敷割の変化を確認できます。大きい屋敷は、家臣の中でも譜代家臣や姻戚関係のもの、少し小さくなつた屋敷は、外様家臣など後から家臣となつたもの、さらに小さい屋敷は、職人・工人のものとも考えられています。

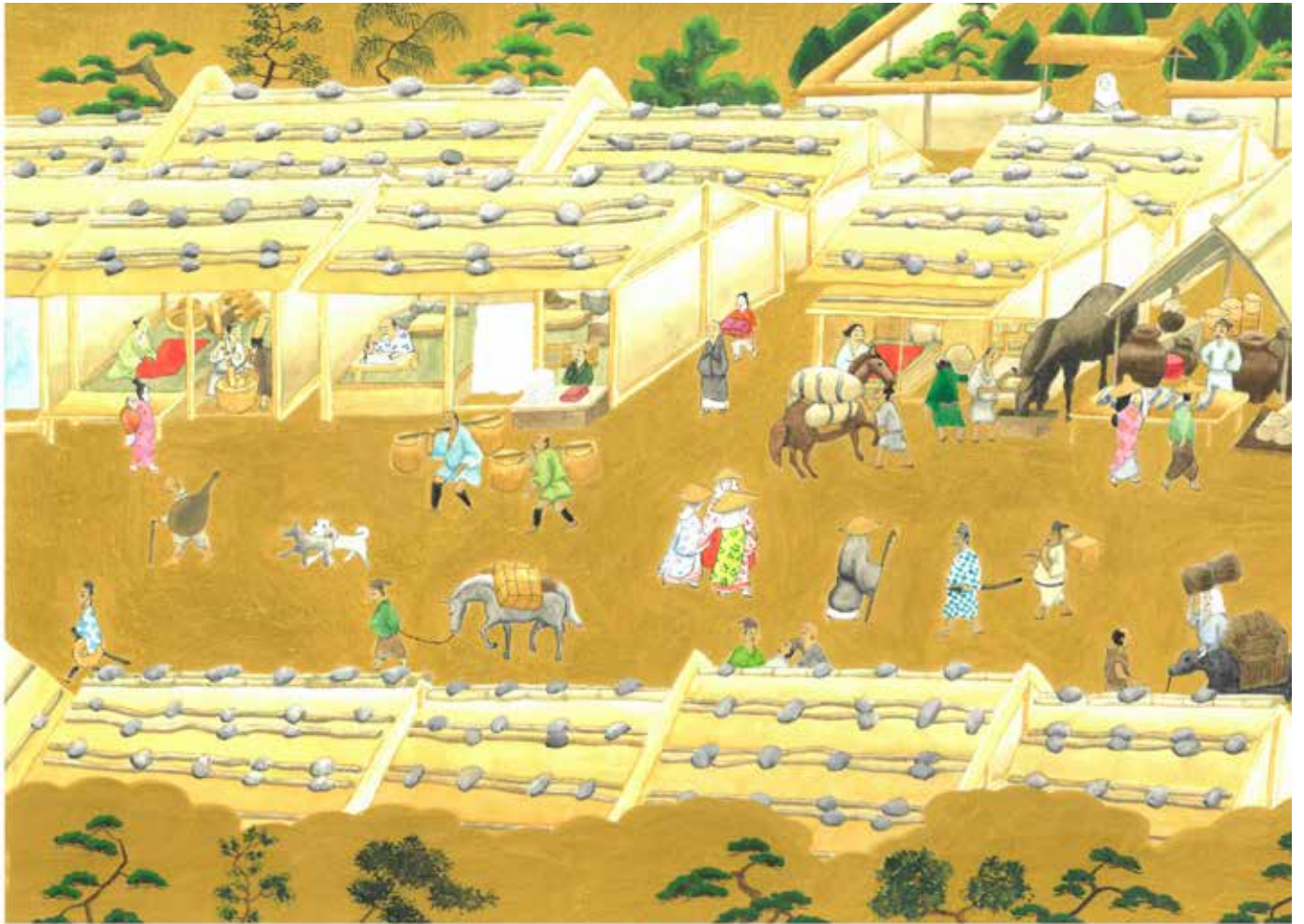
大きな屋敷の脇には必ず井戸が存在し、いつでも水を使えるようにしていました。浪岡城は、東側から傾斜する扇状地の突端部にあり、浪岡川の北岸、地下水が豊富な場所に立地しています。昔の人々は、水脈を探すことなど、自然の地形を読み解くことに非常に長けていたと思われています。

また、井戸の木枠は、ほとんどがアスナロヒノキ（ヒバ）を使用していました。アスナロヒノキは、抗菌・防虫・消臭等の効果に優れ、古くから社寺仏閣の建材として使用されており、現在は高級木材として扱われています。

発掘調査で大工道具や鍛冶用具などが見つかつており、城内で職人・工人が大工仕事や鍛冶仕事などに従事する姿が想像されます。

また、鏡や耳かき、紅皿も出土しており、城には女性が居住し、当時から化粧をして口紅もつけていたこと、針や鋏の出土から裁縫をしていたこと、苧引金の出土から麻や苧の糸生産等をしていたことがわかります。

そのほか、馬具の出土から馬の飼育をしている人や、宗教具の出土から密教的な祈りをしている僧侶など、たくさんの人々が浪岡城で暮らしていたと想像されます。



浪岡城下町の様子

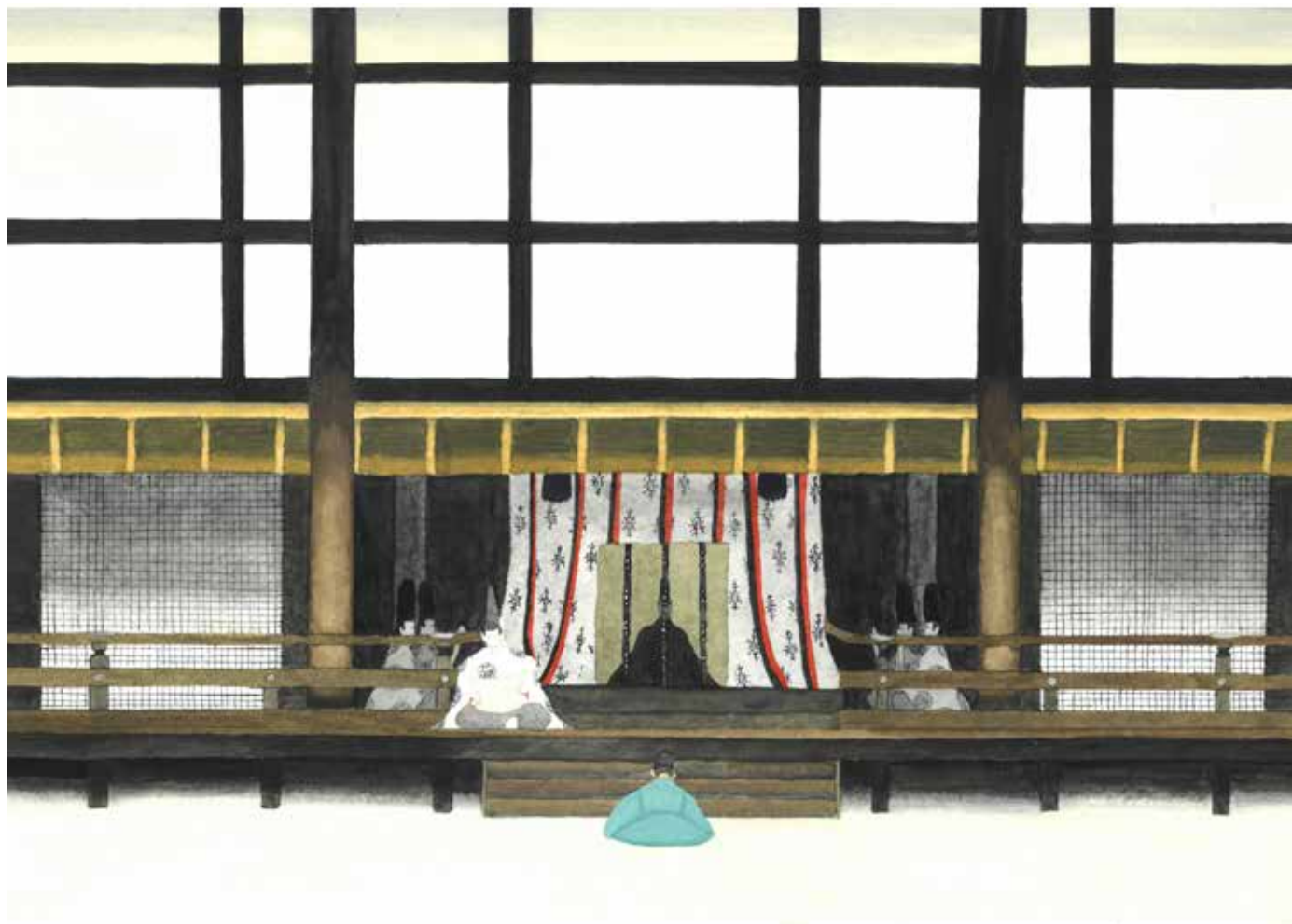
## 第六章 交易と文化

浪岡城跡の出土品の中には、中国製青磁・白磁・染付や日本製の瀬戸・美濃などの碗や皿、朝鮮の焼き物、茶の湯道具、香道具、文房具、アイヌのガラス玉などが見つかっており、当時から様々な文化が入っていたことがわかります。

浪岡城跡で発掘された茶壺や天目茶碗などは、15〜16世紀の京都を中心に流行していた茶の湯の文化が、同時期の浪岡城内にも浸透していたことを物語っており、おそらく内館では日常的にお茶を点てていたと思われます。このような遺物は、同時代の城館である尻八館・根城・聖寿寺館・種里城などでも出土しています。

京都の公家である山科言継の日記『言継卿記』の天文21年(1552)4月2日条に、言継は、浪岡北畠氏に送る書状を調べ、それに「御礼」として茶壺を添えて贈答したと記しています。浪岡城跡から出土した茶壺の中には、山科言継から贈られた物があるかもしれません。また、茶の湯に関わる逸話として、平尾魯仙著の『合浦奇談』には、天保年間(1830・4)に浪岡城跡から掘り出された茶釜を炉にかけてところ、湯の沸く音が清雅にして逸品であったと記されています。

浪岡城跡から発掘された中国製や朝鮮製及び国内各地で生産された焼き物、その他の交易品の数々は、日本海を船運によって北上し、油川湊(青森市)に荷揚げして陸運や河川運搬で持ち込まれたと考えられ、浪岡城が中世の東アジアの商業交易圏に含まれていたことが想像されます。中世の浪岡城下町では、市場が頻繁に開催され、様々な物品の売買が行われていたものと推測されます。



叙爵任官の様子

## 第七章 叙爵任官と伊勢北畠氏

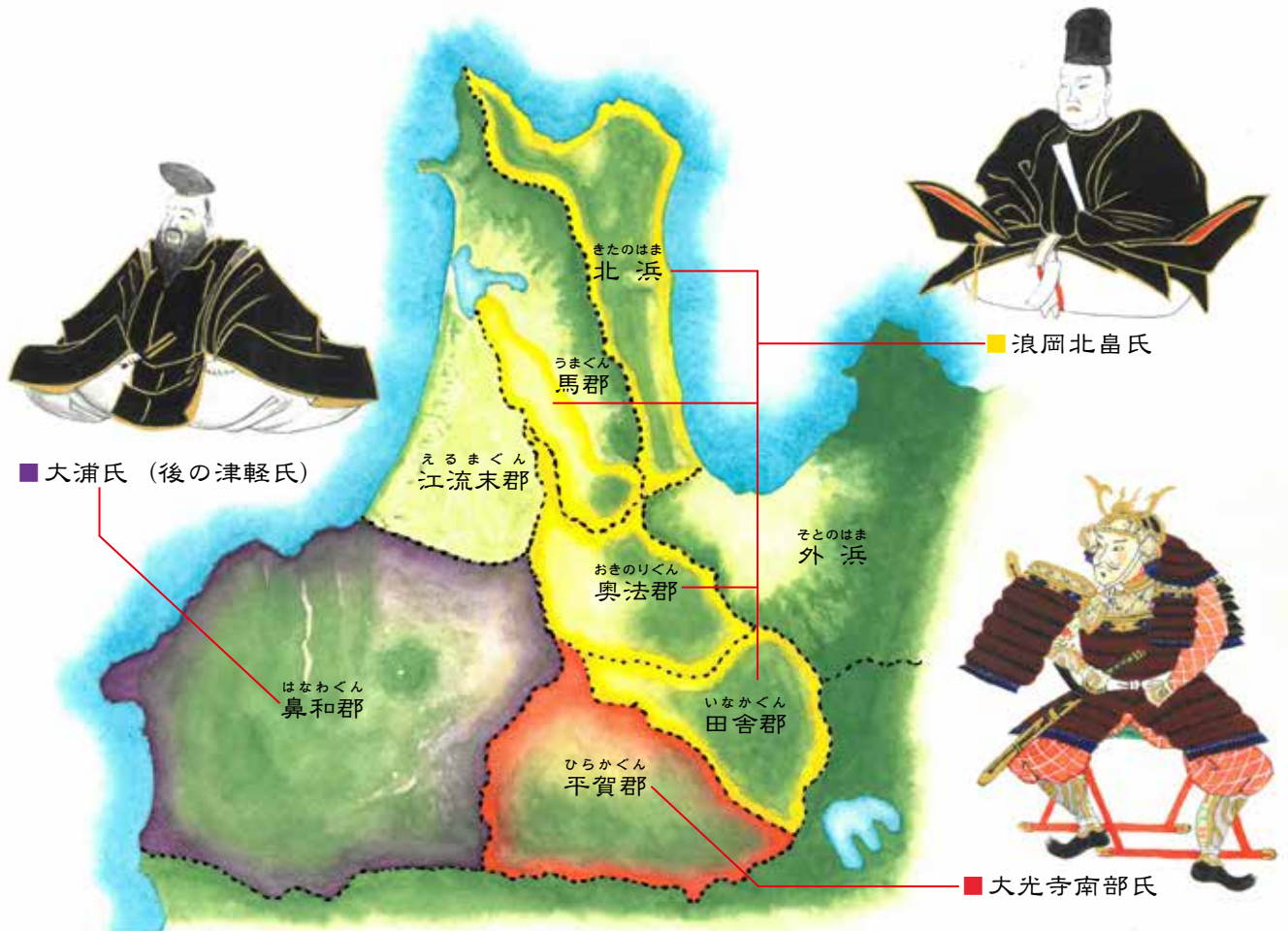
『言継卿記』には、浪岡北畠氏に関する記述が9か所あります。この記述から、浪岡北畠氏は、山科家に連絡を取り、使者を訪問させ、山科家を介して叙爵任官の根回しをしていました。

そして、言継が記した『歴名土台』によれば、浪岡北畠氏では、具永とその息子・具統、孫・具運の3名の叙爵任官が確認できます。

具体的に見ていくと、具永と具統は、ともに従五位下の初爵と同じ日に、貴族身分でなければ許可されない侍従に任官されており、加えて、浪岡北畠氏の任官昇任コースは、奥羽の他の有力武家と異なり、貴族身分の有力な武将として位置づけられていたことがうかがわれます。

このような、浪岡北畠氏の叙爵任官とほぼ同じ軌跡をたどっているのが、伊勢国司家を嫡流に持つ伊勢北畠一族です。伊勢北畠一族は、北畠親房の三男・北畠顕能を先祖とし、天正4年（1576）に織田信長に実質的に滅ぼされるまで、伊勢国司家を宗家として、南伊勢を中心に勢力を有していた公家大名です。伊勢国司家は、伊勢に在国したままで公卿にまで任命される貴族身分でありながら、室町幕府から守護職に補任され、武家としての扱いを受けていました。浪岡北畠氏は、この伊勢北畠一族と同じ昇任コースをたどっていたのです。

また、浪岡北畠氏が作成したという『津軽郡中名字』では、具永は「伊勢国司浪岡御所具永卿也」と称しています。さらに、伊勢国司家では、実名に「具」の文字を用いており、浪岡北畠氏の具永―具統―具運と一致します。このように、浪岡北畠氏の叙爵任官、そして実名のあり方など、浪岡北畠氏と伊勢北畠家は、その繋がりが示唆されます。



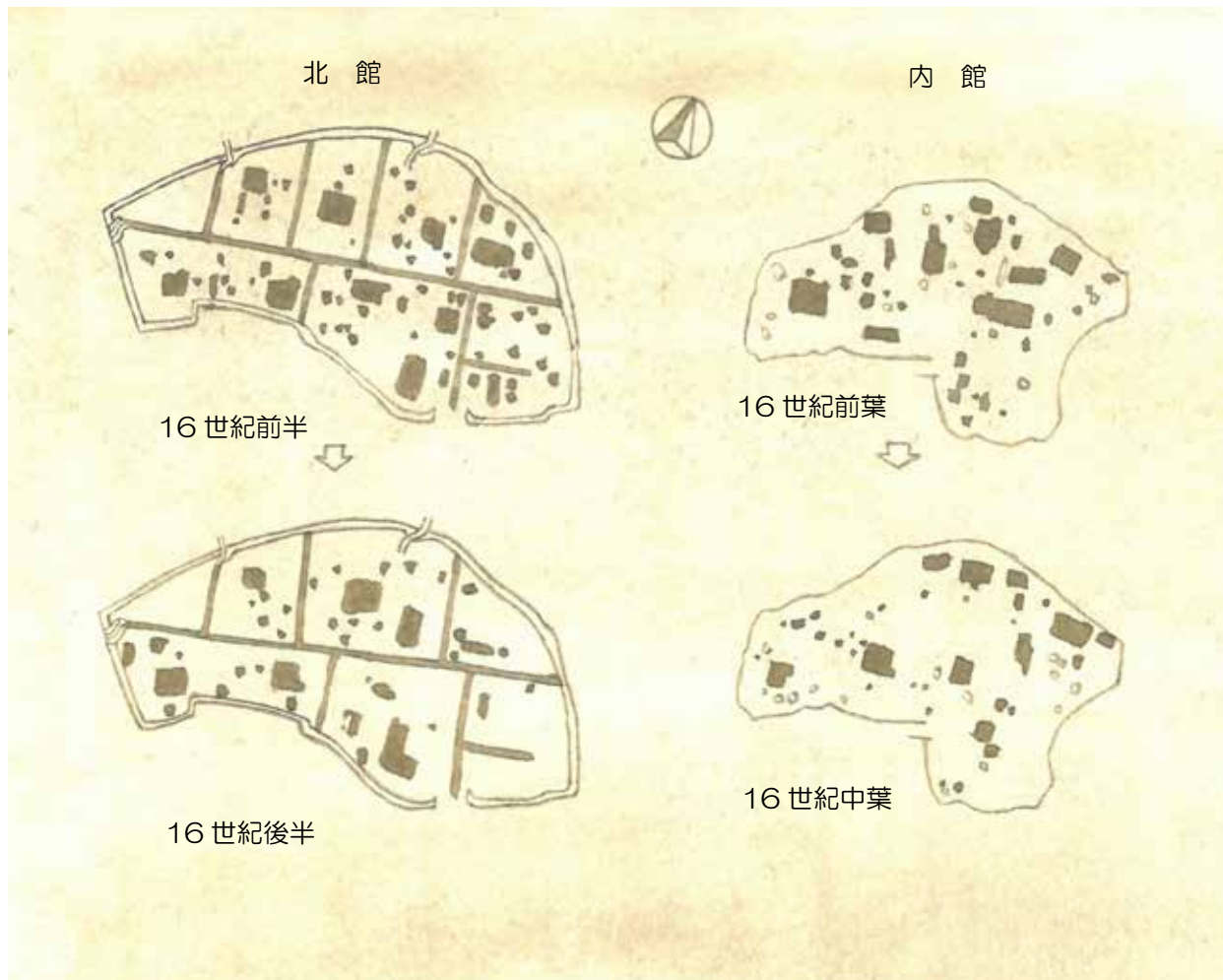
天文年間の津軽地域の勢力圏

## 第八章 最盛期と衰運

16世紀前半の津軽地域では、三戸南部氏の当主安信の弟・南部高信を津軽郡代として石川城（弘前市）に置き、既に津軽西浜に入市していた南部氏一門の大浦氏と、平賀郡の大光寺城主・南部政行を両翼として、津軽地方の支配を強化していったとされます。そうした中でも浪岡北畠氏の所領は維持されており、発掘調査によれば、この頃に礎石を使った建物（礎盤石建物）が内館に建てられ、北館には武家屋敷的な区画が現れており、建物の密度が増加し、井戸も充実していたことがわかるなど、浪岡城が最盛期を迎えたと思われます。

また、前掲の『津軽郡中名字』には、この頃の津軽地域の勢力圏についての記録があります。この記録は、天文年間に浪岡北畠氏が作成したと考えられ、浪岡御所による津軽支配の正当性を主張しようとする意図が見えますが、天文年間の津軽地域の勢力圏についてイメージしやすいため、ここにその内容を紹介します。

浪岡北畠氏の所領は、田舎郡2800町（田舎館、尾上、平賀、黒石の各一部等）と奥法郡2000余町（藤崎から羽州街道沿いに常盤、黒石の一部、浪岡の中央部から青森市の孫内の山間部、浪岡の吉野田から北上して五所川原、金木、市浦の一部等）及び沼深保内1000貫（藤崎の亀岡より北方にあったとされる浪岡北畠氏が新規に開拓した直轄領の可能性有）であり、鼻和郡3800町（深浦、鱒ヶ沢、鶴田、板柳、弘前西側、目屋等）は大浦盛信、平賀郡2800町（碓ヶ関、大鰐、尾上の一部、弘前東側等）は大光寺南部政行の所領であると記されています。また、浪岡北畠氏は、北浜（津軽半島の東側、安方、油川から北へ海沿いに今別、竜飛等）にも影響力を持っていた



北館及び内館の遺構の移り変わり

め、この三大名の中で、経済力は最も大きかったと考えられます。

ちなみに、松前藩の家譜で正保3年（1646）に成った『新羅之

記録』では、永禄3年（1560）春、後に初代藩主となる蠣崎慶広

が津軽に渡り、浪岡御所右衛門督頭慶（具運）に謁見しています。こ

のとき、慶広は、松前からの船着場として潮潟野田玉川村（東津軽郡

外ヶ浜町平館にあると推測される）を賜ると記しています。

発掘調査により、16世紀前半に最盛期を迎えていたと考えられている浪岡北畠氏ですが、16世紀後半から建物跡が少なくなり、その勢力が衰退していったことがわかります。

衰退の原因は、永禄5年（1562）に起こった「川原御所の乱」だと考えられます。川原御所の乱とは、浪岡北畠一族の川原御所・北畠具親子（子の名前は不明）が、当主である浪岡御所・北畠具運を殺害し、川原御所親子も討ち取られてしまったという事件です。



川原御所の乱の様子

## 第九章 川原御所の乱

川原御所は、浪岡御所具永の弟・具信であるとも言い、浪岡御所にとつては一族の重鎮であり、高台の浪岡城を構成する曲輪内ではなく、外郭の市場町に接して居館を構えていたと考えられています。その場所は、浪岡城跡南西方の浪岡川を挟んだ対岸部にあり、現在は「川原御所之址」碑が建てられています。

この事件の要因は、所領の境目争いと記すものもありますが、確かなところはわかっていません。事件を伝える記録の一つに、浪岡御所に出仕していた佐藤只之介の家記である『永禄日記』があります。事件が起こったのは、永禄5年（1562）4月のことですが、年初めの1月2日には、浪岡御所具運が悪夢を見たとのことで祈禱を行い、さらに翌3日には、浪岡御所の奥方も悪夢を見たと人々が口にし、「何と不思議な事か」と言われていたようです。このように事件を暗示するような記事の後に、4月5日の事件の記述となります。

事件は、川原御所・具信親子が浪岡御所に切り入り、城中大騒動となつていて浪岡御所を殺害したものの、川原御所親子も討ち取られるというものでした。その後、川原御所の家中は離散し、浪岡御所の後継者として、まだ五歳の息子である、後の頭村を立て、具運の弟・頭忠（または左衛門尉頭範）が養育しますが、浪岡譜代の家臣の多くは浪人となつたと伝えられています。

大御所と呼ばれた浪岡御所・具運と、その一族である重臣を共に失つたこの事件は、重大事として受け止められることになり、その記憶は、後の大浦為信による浪岡城攻めの背景として位置づけられ、弘前藩の歴史書に刻み込まれることにもなりました。



浪岡落城

## 第十章 浪岡落城

藩政時代の津軽側の記録によると、永禄10年（1567）に南部氏一門の大浦氏の家督を継承し、大浦城（弘前市）の城主となった大浦為信は、元亀年間（1570-73）に三戸南部家中で起こった家督相続をめぐる対立に乗じて反旗を翻し、元亀2年（1571）5月5日（6日とも）に石川城（弘前市）を急襲して攻め落とし、同日、和徳城（弘前市）も攻め落としたとあります。

さらに為信は、天正4年（1576）1月に大光寺城（平川市）を攻め、これを掌中に収めました（天正3年8月に大光寺城攻めを行っています）。この時点ではまだ落城していなかったという説もあります。そして、天正6年（1578）7月、為信は浪岡城攻略に打って出ました。

藩政時代の記録では、為信は浪岡城攻めに際して、15年ほど前に起きた川原御所の乱を引き合いに出し、浪岡勢が手薄になっていることや、事件当時、幼かった頸村の後見人的存在であった具運の弟が、この年に病死したとして、事件と浪岡攻めを関連づけようとしており、川原御所の乱が重大事として藩政時代の津軽地域に認識されていたと言えるでしょう。

さて、おなじく藩政時代の記録によれば、為信は浪岡城へ兵を進める前に、二つの「事前準備」をしていたと伝えられています。その一つは、浪岡御所の有力家臣と目される吉町弥右衛門を内通者とすることに成功したことで、浪岡の様子は、吉町から逐一、為信のもとへ届けられていたのです。

もう一つは、砂子瀬勘解由と小栗山左京という二人の「忍びの者」

が盗人・ばくち打ちなど無頼の徒を抱き込んだことです。この時、為信は浪岡城攻めの大義を困窮にあえぐ「民を救う」ことと言い、彼らを味方につけます。そして出陣の日、彼らは為信の指示に従い、そこかしこに火を懸け騒動を起し、略奪行為に及びます。当時の戦場では、雑兵による「放火と物取り（略奪）」は一体であったとされ、浪岡城攻めにおいても、そうした行為が行われていました。一方、為信の軍勢は、浅瀬石城と大光寺城の軍勢700余名を本郷・竹ヶ鼻口より、森岡・兼平の大浦譜代家臣の軍勢600余名を赤茶村より、為信本隊1000余名を十川口よりと三方から押し寄せて、貝鐘を鳴らし、関の声を揚げて、浪岡城に攻め込んだとあります。

そして、先のばくち打ちや盗賊たちが、方々の土蔵・文庫を打ち破り、浪岡北畠氏が数代に亘って蓄えた金銀・重器を奪い取り、乱妨を働いたと言います。大浦勢は、こうした混乱に乗じて、やすやすと浪岡城を奪い、浪岡御所・北畠頭村は、ばくち打ちらに捕らえられ、大浦側に引き渡された後、切腹をして最後を遂げたと伝えられます。

なお、戦後、こうした盗人・ばくち打ちらは、武士身分に取り立てられ、砂子瀬・小栗山の軍団に編成されたとも言います。

また、戦の当日、北畠一族の北畠左近頭則が、譜代の家臣を連れて、所用で油川城（青森市）へ行っていました。そこへ浪岡城からの落武者が逃げ込んで来たため事態を知ることとなり、一矢報いようとしませんが、家臣に諫められ、姉の所在を探り当てることに力を注ぎ、無事浪岡から逃れてきた姉主従と遭い、油川城主の協力により、船で田名部に渡り、南部家の世話になったとあります。

このほかにも、浪岡北畠氏の有力な一族であった、北畠弾正大弼とその息子・右近慶好は、御所と縁戚関係のある檜山下国安東愛季に

仕えることとなります。特に右近慶好は、秋田姓を与えられ、その子孫は、三春藩秋田家の家老職の家柄として幕末まで続きました。さらに、左近頭則は、南部信直に仕えました。また、津軽家に仕えた者としては、刀鍛冶となった家系や弘前藩に藩医として仕官した山崎清朴の家系が挙げられます。





茶臼山・六羽川合戦の様子

## 第十一章 その後の浪岡城と戦国津軽

最後の浪岡御所・頭村の正室は、檜山下国安東愛季の嫡女でした。頭村の死後は、慶松院と称して、父・愛季のもとに戻っていました。

こうした関係を背景に、愛季は、浪岡城の落城後、ほどなく津軽に攻め入り、天正6年（1578）10月初めまでに帰陣しています。また、安東氏麾下であり、浪岡御所とつながりがある夷島の蠣崎季広が、翌年1月に、浪岡への出陣の意向を安東氏側に伝えていきます。為信を南と北から挟撃しようという作戦だったのでしょうか。こうした愛季の津軽侵攻の中、天正7年（1579）7月の平賀郡茶臼山・六羽川の合戦で、為信をあわや戦死という危機にまで追い詰めます。

さらに、為信と愛季が戦を継続する一方で、家督を巡る三戸南部氏の騒動も、天正9年（1581）に信直が継承し終息しました。こうした状況のもと、天正10年（1582）になると、元龜2年（1571）に南部氏に反旗を翻していた為信が、信直に赦免を申し入れ、その麾下に復帰したという説もあります。この時、南部信直は、弟の政信を津軽郡代として浪岡城に置き、為信がその後見人的立場になったというのです。加えて、夷島においても、家督をめぐる謀反事件が浪岡御所滅亡後に起こります。これは、浪岡御所とつながりの深い蠣崎慶広が、その後ろ盾を失ったことによるものであったと考えられます。

このように、天正6年（1578）の浪岡城の落城、浪岡御所の滅亡は、その後の津軽地域の政治史を大きく動かす出来事だったのです。その後の浪岡城については、江戸時代には田畑として利用されたことわっていますが、発掘調査で煙管など17世紀以降のものが出土したことから、落城後も城内で生活していた人々が存在していたと思われるます。



現代の浪岡城跡と岩木山

## 第十二章 近代以降の浪岡城跡

明治期になると、かつて南朝に忠誠を尽くした北畠氏一族である浪岡御所のような名族に対する関心が高まり、浪岡御所関係史料の調査研究が始まり、浪岡北畠氏顕彰へとつながりました。

明治15年（1882）には、浪岡城跡に北畠古城跡碑が、北畠氏の墓所と伝わる五輪塔が残る場所に北畠累代墓碑が建立されました。

大正時代に入ると、浪岡城跡の内館に「御大典記念公園」と「行丘公園」の二つの石碑が建立されます。どちらも大正天皇即位を記念して、在郷軍人会を中心に、大正4年（1915）に建立されました。

さらに、内館の周囲に松や桜が植栽され、昭和10年（1935）頃からは観桜会が開催されるようになります。

そして、皇国の国威発揚の時勢に後押しされ、南朝ゆかりの北畠浪岡御所の研究が活発化したことなどを背景に、昭和15年（1940）2月10日、浪岡城跡は、青森県内で初の国指定史跡となりました。

以後、浪岡城跡は、昭和44年（1969）から史跡の公有化、同52年（1977）から整備のための発掘調査、同62年（1987）から環境整備事業を進め、平成10年（1998）には、史跡公園として地域住民に開放されました。

以来、浪岡城跡は、地域住民に親しまれ、毎年春になると桜の花が咲き誇ります。

かつて浪岡御所と呼ばれ、華やかな賑わいを見せていた時代と、戦乱に巻き込まれ、落城の憂き目にあった時代。

栄枯盛衰の舞台となった浪岡城跡では、毎年、樹齢100年となった桜の開花によって、浪岡の悠久の歴史を思い起こさせてくれます。

## 引用・参考文献

---

- 青森県 2003 『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』  
青森県 2018 『青森県史 通史編1 原始古代中世』  
青森放送 1979 『青森県地名辞典』  
青森市 2011 『新青森市史 通史編第1巻』  
角川書店 1985 『角川日本地名大辞典2 青森県』  
工藤清泰 2017 「浪岡城」『東北の名城を歩く 北東北編』（株）吉川弘文館  
瀧本壽史 2007 『図説 青森・東津軽の歴史』（株）郷土出版社  
浪岡町 2004 『浪岡町史 第二巻』  
浪岡町歴史資料館 1990 『浪岡城—中世城館の復元—』  
長谷川成一ほか 2012 『青森県の歴史』（株）山川出版社  
弘前市 2003 『新編 弘前市史 通史編1 古代・中世』  
平凡社 1982 『日本歴史地名大系2 青森県の地名』  
村上重良 1980 『皇室辞典』（株）東京堂出版  
盛田稔・長谷川成一 1991 『図説 青森県の歴史』（株）河出書房新社

### 作図について

---

本資料の作図は、里村真吾が担当し、これまでの史料や写真等を基に作成したイメージ図である。

### 浪岡城物語－浪岡城の謎を紐解く－

発行日：令和3年3月31日  
発行：青森市教育委員会  
編集：青森市教育委員会事務局文化財課  
青森市新町一丁目3-7  
TEL 017-718-1392

